



テーマ別実戦演習

藤岡陽子「海とジイ」

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夕飯の支度をするためキッチンに立っていると、電話が鳴った。

濡れた手をタオルで拭いて電話に出ようと思ったら、今度はインターホンが「ピンポーン」と陽気な音を立てる。どっちを先に出よう。真鍋千佳は数秒迷った後、リビングで本を読んでいた息子に、

「優生、電話取ってくれるかな」

と声をかけた。小学四年生の息子はいわゆる不登校児なのだが、家の中で反抗的な態度を取るわけでもなく、千佳の頼みは素直に聞いてくれる。

「はい。真鍋です」

優生が電話に出るのを横目で確認した後、千佳はモニター付きのインターホンのボタンを押した。

『あ、おれ。いまマンションの下のエントランスなんですけど、家の鍵忘れたから玄関開けといて』

画面に、枠からはみ出しそうな大きな顔が映し出される。夫の毅然だ。

「電話、誰からだった？ ……あれ、優生？」

夫のために玄関のドアの鍵を開け、またリビングに戻ったわずかの間に、優生は姿を消していた。消えるといっても息子が家の外に出ていくことはないのでも、自分の部屋に戻っただけだ。父親が帰ってきたことに気づき、慌てて自室に駆け込んだに違いない。

いまから一年ほど前、優生が登校拒否になった時期から、夫と息子はほとんど言葉を交わしていない。学校に行き渋る優生を毅然が怒って殴りつけたことがあり、それからずっとぎくしゃくしたままだった。毅然は初めて手を上げてしまった自分を持って余し、優生も体罰に萎縮している。

★
着信履歴を見ると、電話は毅然の祖父と伯母が暮らす故郷からかかってきたものだとかかった。そして、千佳は先月、毅然から故郷の祖父の体調が思わしくないので、ひ孫の顔を見せに行つてやってほしいと頼まれたときのことを思い出した。

★
優生が不登校になったとききっかけは、三年生の体育の授業でお漏らしをしたことだった。

「持久走の時間だったんです。グラウンドを走っている途中で真鍋くんが急に動かなくなりましたよ。その場に蹲ってるから何ごとかと驚いてみんなで彼の周りに駆け寄ったら、足元に水溜まりができていたんです。保健室で下着の着替えとジャージを貸し出しましたから明日洗って返して——」

担任から電話で連絡を受けた時は愕然としたけれど、それでもその時点では、これから先一年間も学校に行けなくなるなんて考えもしなかった。

もちろん千佳は必死で登校させようとしたし、実際に無理やり家から連れ出したこともある。でも結局は泣いて嫌がる息子を、学校に引きずっていくようなことはできなかった。なにより①優生が学校に行けなくなった本当の理由が他にあることを知った後は可哀想でたまらなくなり、もう「学校」という言葉も口にしなくなった。

「おれが小学生の時なんか、学校でウンコ漏らした奴がいたぞ。小さな島だったから島中のニュースになってな。そいつ、中学を卒業するまでベンジャミンって呼ばれてたんだ。でも休んでなかったぞ、学校は一度だって。大便に比べたら小便漏らしたくらいいいことじゃないか」

もともと少々なことでは動じない性格の毅然は、そんなふうに優生を慰めたりもした。でももちろん、優生には響かない。小学生の時から大学を卒業するまで少林寺拳法ひと筋。人一倍頑丈で心も強靱な夫には、千佳や優生の気持ちなどわかりはしない。「骨太で頼りがいがある」という夫の評価は、家族の平穏が崩れた時、「無神経な楽道家」にすり替わる。いまでは優生のことで夫に相談することはなにもない。

だから本当は、どれだけ毅然に強く乞われても、優生を夫の故郷に連れていく気などなかった。

だが結局は優生のほうから「ぼく行ってもいいよ」と千佳に言ってきた。徐々に陰湿なムードになっていく両親の仲裁に入るような形で、息子は一年ぶりの外出を決心してくれたのだ。

へ 中略 へ

優生の口から彼の本当の苦しみを聞いたのは、不登校になってひと月が過ぎた頃だったろうか。

「クラスにひとり、暴力をふるってくる奴がいるんだ。そいつはぼくがトイレに入ると必ず後をついてきて、殴りかかってくる。トイレの床に倒されて、ぼくが起き上がろうとするとまた殴りかかってくるんだ。何度も何度にもやにや笑いながら。それでぼく、学校のトイレには行かないと決めたんだよ。お母さんには話さなかったけれど、学校では一度もトイレに行つてない。持久走の途中で漏らしたのは、体育の授業が給食の後だったからだ。いつもは残す給食の牛乳とみそ汁を、その日はうっかり全部食べてしまったから……」

それまでずっとだんまりを決め込んでいた優生が事実を打ち明けてくれたのは、母親の限界を感じたからだだろう。その日の朝も学校に行こうとしない優生に対して、もうどうしていいかわからずにその場で泣き崩れてしまった時、「お母さんごめんね」と優生は九歳の恥辱をすべて吐き出してくれた。

もちろん千佳はその事実を担任に告げ、優生に暴力をふるった男児の家に乗り込んだ。

「もう二度と真鍋くんに暴力をふるいません」男児にそう誓わせた時は、これで苦しみは終わると安堵した。担任も「二度とこんなことはさせない」と真摯な態度を見せてくれたし、四年生に進級する際にはその男児とクラスを別にしてもらった。

だがそんな簡単なものではなかったのだ。優生が負った傷は、母親の千佳やおそらく彼自身が考えるより深いものだった。

暴力による心的外傷——通院している思春期外来の精神科医はそんなふうの説明した。

「優生くんの心の中で、トイレと恐怖が密接に繋がっているのです。公共のトイレで繰り返し暴力を受けたことで、外のトイレそのものに脅威を感じているのですよう」

家以外のトイレにひとりで入ることができなくなった優生は、外出を避けるようになった。病院には通っているが、そこでもトイレは使わない。どうしても我慢できなくなった時は、千佳が個室に一緒に入ることで乗りきっていた。優生はなにも悪い

ことなどしていいない。それなのに一年の間に、生きるための大事なかを失くしてしまった。覇氣、明るさ、自信、そうした人の輪郭を濃くかたどるものを失くしてしまった。

☆

千佳と優生、妹の茉由が毅の祖父（優生にとっては曾祖父に当たる）が住む瀬戸内海に浮かぶ島に着くと、毅の祖父の清次と伯母の百合子が迎えに来てくれていた。

☆

「百合子さんは、毅さんのことはよくご存じなんですか」

「それよう知つとるわ。毅が義妹と島を出るまでは、しょっちゅう会うつたんじゃから」

「昔からあんな感じですか」

「あんなって、どんなじゃ」

「毅さんって、小学生の時からずっと少林寺ひと筋でしょう。体も心も鋼みたいに頑丈で。なんていうか、繊細なところが全然ないっていうか」

千佳がそう言うと、百合子さんは顎を空に突き出し豪快に笑った。

「そんなことないわあ。こんまい時はおとなしい子だったがあ。おとなしいというより気が弱いんじゃ。島では弱虫のことを『おとつちやま』言うんじゃが、あの子は周りの大人からずっと『おとつちやま』って呼ばれとった。それがある日急に多度津にある少林寺の道場に通いたいと言い出して、それから人前で泣かんようになったんじゃけど、それまではすぐにピイピイ泣く『おとつちやま』じゃったわ」

幼い頃は道端で野良猫が死んでいるのを見ても「可哀想」と涙ぐむような優しい子だったと百合子さんは目を細める。こんなに線が細くて生きていけるんだろうかと、自分も、毅の母親も心配していた。そう言って笑う百合子さんの顔を、優生が上目遣いに見つめていた。

「そうじゃ総領、最近失くしたもんはないか？」

前を歩いていた清次が、突然立ち止まって振り返った。

「え……」

優生の戸惑いが、風音にかき消される。
「まあええわ。これから大天狗神社に連れてってやる。大天狗神社はなあ、探しものを取り戻してくださるご利益のある神社なんじゃ。着くまでに半時間くらい歩くから、探しものがなかったか思い出しておけ」

☆

清次は毅の父親である自分の息子が亡くなったときのことを話してくれた。毅の父親は、嵐の日に船をロープで棧橋に固定しようとしていたところ、海に落ちて亡くなっていた。

☆

「でもな、その嵐の日を境に、優生と茉由のとつちちゃんは、いまから行く大天狗神社にお詣りをするようになったんじゃ」
学校からの帰り道、ランドセルを背負ったままで石段を上がっていく毅の姿がその日から毎日見られるようになった。漁から戻ってくる船上からも、黒いランドセルが太陽の光を集めながら山を上っていく様が見えた。

「※うらは、毅が天狗様に『とつちちゃんを探してくれ』と頼みに行つとると思つてたんじゃ。海に落ちたまま、うちの総領は還つてこなかったからのう」

「違つたの？」

優生がぼつりと問いかける。

優生が自分から言葉を発したことが嬉しかったのか、清次は口をすぼめて間を取ると、

95 「ああ、違つたんじゃ」
ひくりと眉毛を動かす。

「雨の日も雷の日も、猪が出てもお詣りをやめなかった毅に、うらは訊いたんじゃ。『※わいは天狗様になにを探してももうてるんじゃ？ とつちちゃんの亡骸か』と」

「それで、茉由のお父さんはなんて答えたの？」

「強い心じゃ、と言いよった。なににも負けん強い心を探してもらつとるんじゃと、毅はうらに言つてきよった。島一番のおとつちやまがと、うらはその時、総領が死んでから初めて愉快な気分になったんじゃ」

100 優生が足を止め、空に続く石段を仰いだ。雨の一滴を待つような顔をしている。

「毅が強くなつていく姿を、うらはこの目で見てたんじゃ。強くなりたいたいと願つた時に、人はもう強うなつてるもんじゃ。うらはそのことを、毅に教えてもううたわ」

105 海と同じ、薄緑色の鳥居が目の前に現れた時はもう、海に浮かぶ島々が目線のはるか下にあつた。海沿いに並ぶ民家の黒や青の屋根瓦が淡い光を帯び、島の紋のごとくきらめいている。
「さあ、あと少しじゃ。優生、茉由、頑張れ。千佳さんもあとひと息じゃ」

110 薄緑色の鳥居をぐり抜け、最後の石段を上りきつた先に小さな祠が見えてきた。

115 「あれが天狗様よ」
祠のすぐ左横、清次が指差す先に注連縄が張られた石垣があり、その岩肌の中に石でかたどられた天狗の顔が浮かんでいる。まるで隠し絵のような石像は、自然の岩に完全に溶け込んでいて、言われなければ見落としてしまいそうだった。

「岩の中に……天狗がいる！」

優生が虚をつかれたようにその場で棒立ちになる。

「さあ優生、天狗様にわいの探しものを出してもらえ」

120 柏手を打つ清次が、石造りの天狗像に向かって背筋を伸ばす。茉由は清次に習つて手を合わせ、頭を垂れていた。

125 （お母さん、私、この前落した自転車、探してもらうね）
茉由が耳元で囁くのに唇だけで笑つてみせ、そのまま薄目を開けて優生の横顔を盗み見る。優生は手を合わせることなく、岩の中に埋まっている天狗の像を食い入るように見つめていた。

「上つてきてよかつたじやろう」

130 下りの坂道は、踏み外さないよう一歩ずつ慎重に足を出した。上りとは違い、眼下の景色を眺めながらなのでそれほど辛くはない。

「九十五まで生きとると、ええことも悪いこともたくさんあつたわ」

135 連なる屋根瓦の合間から見えていた小さな海が、足を一段踏み出すごとに大きく広がっていく。

「勝つこともあつた。負けることもあつた」

140 石段の両側は冬枯れの笹林で覆われていたが、ところどころに野生の南天が生え、その鮮やかな赤色が目を引いた。

「時には逃げることもあつた人生じゃ」

145 誰に向かって言葉をかけているのか、あるいは誰にも向けられていないのか、清次の言葉は白い空に吸い込まれていく。言葉だけでなく清次自身が空に溶けていきそう、茉由もそれを感じたのか「清じいちゃんつ」と清次の手を取る。風船を繋ぎ止める細い紐を、ぎゅつと握りしめるみたいに。

150 「ただな総領。逃げてもいいが、逃げ続けることはできないんじゃ。自分の人生から逃げ切ることなど、できないんじゃよ」
同じ言葉を二度繰り返し、清次が優生の頭を優しくつかむ。

「うらの九十五年は、ええ人生じゃった。最後の最後にこんな可愛いひ孫らに会わせてもらえるなんてのう。嬉しいのう、百合子。嬉しいのう、毅。嬉しいのう、海の中におけるうらの総領よう」

緩やかに波打つ海が、気がつけばすぐ目の前にあつた。湿気をはらんだ潮風が全身を通り抜けていく。

「どうした総領、なにをもしもじしとるんじや。……小便か？」

優生の太腿に力が入り、両膝が小刻みに震えている。

「こつち来い、立小便じや」

猪が出るかもしれないけん、もし出たら目を合わすな。清次が優生の腕を取り、藪の中に連れていく。カサカサと枯れた笹をかき分け藪の中に隠れる二人の姿は、あつという間に見えなくなった。

しばらくすると、山鳥の鳴き声に混ざって勢いのある水音が聞こえてきた。ほとばしる水流が枯葉を打ち、四方八方に飛び散る音だ。そのためらいのない自由な音に胸が引き絞られ、
③千佳は自分の胸を右手で強く押さえる。兄の事情を知っている
茉由が嬉しそうに千佳を見上げるのを、百合子さんが不思議そうに眺めていた。

☆
ところが、大天狗神社からの帰り道、清次は突然倒れ、病院に緊急搬送されてしまった。

☆
その後、百合子さんだけが船に乗り込み病院まで付き添い、千佳と子供たちは翌日の朝、フェリーで入院先を見舞った。千佳たちが訪れた時には意識を回復していたが、それでもベッドに横たわる清次からは、前の日に見た精気は失われていた。

「迷惑をかけて悪かったのう」
病室で百合子さんと顔を合わせると、彼女はすまなそうに千佳たちに向かって目を瞬かせた。④とてもじゃないが本当はもう歩ける状態ではなかったのだと、百合子さんは困り果てたように笑う。千佳たちの前で元気に振る舞っていたのは、週に一回、島に回診に来てくれる先生に、痛み止めを射ってもらっていたからだ、と。

「元気な姿を優生と茉由の記憶に留めておいてほしかったんじやろ。何日前じやったやろか、毅から電話があつての。優生がもう一年間も学校に行けてないから助けてほしいって。じいちゃん、うらの息子を救ってくれないかって。……それで張りきったんじやわ。普段はほとんど口をきかんじいさんやのに、一年ぶんほど喋つてのう。⑤伝えたいことがたくさんあつたんじやろ……」

千佳が何も返せずにいる間、優生と茉由は数本の管に繋がれた清次の頭側にしゃがみ込み話しかけていた。清次は酸素マスクをずらし、二人だけに聞こえる小さな声で言葉を繋いでいる。なにを話しているのか、三人はしばらくふわふわと喋り続け、その様子は風いだ海を漂う三艘の船のようだった。

「清じい。ぼく、学校に行けてないんだ。……もう一年間も」
優生が突然声を張ったのは、そろそろ病室を後にしようという時だった。

「本当は行きたいけど無理で……」
言いながら優生はベッドサイドに屈み込む。

（注）多度津：香川県にある町。少林寺拳法の総本山・総本部がある。
総領：長男を指す言葉。
うら：自分を指す言葉。
わい：相手を指す言葉。

200 清次は点滴に繋がれているほうの手を力なく持ち上げ、優生の頬に触れた。頬を撫でられるままにしている優生の耳元で唇を動かす。

「ええな、約束げんまんじや」

205 清次が口端を上げて微笑むと、優生は瞬きだけで頷いた。二人の間でとても大事な約束が交わされているのだとはわかったけれど、それがなんの約束だったのか、優生はその後も決して教えてはくれなかった。

でもあの日、優生はひとりきりで病院のトイレに向かったのだ。青ざめ、唇を噛みしめるようにして、薄暗い病院のトイレに入っていた。

210 部屋のドアが中から開き、優生が仁王立ちになっているのが見えた。頬に涙の跡が残っている。

215 「清じいが死んだ。午後六時十八分のご臨終だったって百合子おばさんが電話で教えてくれた」

「そう」
語尾がつぶれ、喉の奥で涙を飲み込む音が小さく鳴る。

260 頷きながら思わず目を見張ったのは、優生がランドセルの肩紐を右手に握りしめていたからだ。まだ三年足らずしか使っていない黒いランドセル。四年生になってからは一度も背負っていないランドセルが、彼の手の中でよそよそしく光っている。

「優生……それ」

「明日から学校に行く」

「え？」

270 「約束したから。清じいが死んだ次の日から、ぼくは学校に通うって。どんなに怖くても行くって二人で決めたから」

275 うらが死んだら、その日のうちに優生の元に行つてやるけん。うらの魂は詣り墓には入らん。

じゃから葬式に來んでええ。

その代わり、うらが死んだ翌日は、わいの決戦の日じや。

280 大丈夫。心配はいらん。うらが天狗様に「総領の探しものを見つけてやってくれ」と頼んでおいたからこの戦いは必ず勝てるんじや。

「お母さん。ぼくも強くなりたいんだ」

285 ぎゅつと力を込めて肩紐を握り、優生がランドセルを背負つた。

千佳はその場に両膝をつき、ランドセルごと優生の体を抱きしめる。

290 「お母さん。上履きさ、新しいの買ってくれないかな。いま履いてみたらきつかった」

優生が笑っていた。

「うん。わかった」

295 抱きしめた手をほだいて顔を上げると、涙のせいで、せっかくの笑顔が歪んで見える。千佳があの日天狗様に願った探しものは、息子の笑顔。千佳がこの一年間苦しみながら探し続けたのは、この笑顔だけだった。

もう一度、優生の体に両腕を回す。髪に顔を埋めるように抱きしめる。

目を閉じれば、湿気を孕んだ潮風が子供部屋に流れ込んできた。

藤岡陽子「海とジイ」

問一 ―― ①とありますが、「本当の理由」とはどのようなことでしたか。説明しなさい。

問二 ―― ②とありますが、

(1) 小学生の毅がこのように言い出したのはなぜだと考えられますか。説明しなさい。

(2) このような毅の態度を通じて、清次はどのようなことに気づきましたか。それが書かれている一文を文章中からさがし、はじめの五字を抜き出して答えなさい。

問三 ―― ③とありますが、このときの千佳はどのような気持ちですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 清次のおかげで、小便をしたくなっていた優生が漏らしてしまうことなく、学校でのつらい出来事を思い出さずに済んだので、曾祖父の気づかいに深く感謝している。

イ 家以外の場所では小便をしたがらない優生を無理に誘^{さそ}って、立小便をするように仕向けた曾祖父の強引^{あせ}さに焦り、優生が傷ついているのか心配している。

ウ 優生が清次とともに立小便をしている姿を想像すると、曾祖父と曾孫^{ひまご}の深い絆^{きずな}が感じられ、外出したがない優生を何とか連れてくることで良かったと安心している。

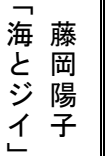
エ 曾祖父のおかげで優生が恐怖を振り払い、家以外の場所で小便ができていることに深く感動し、少しずつでも優生が変わりつつあることに希望を見出している。

オ 優生と清次が、猪が出るかもしれないような危険な場所で立小便をし始めたことに驚き、何も起こらないうちに早く小便を終えないかと気が気ではなくなっている。

問四 ―― ④とありますが、それにもかかわらず清次が優生たちを迎えに行ったのはなぜですか。説明しなさい。

問五 ―― ⑤とありますが、優生に最も「伝えたいこと」を清次自身が語っている一続きの二文を文章中からさがし、はじめの五字を抜き出して答えなさい。

問六 ……線とありますが、このとき優生が「自分の部屋に戻った」のはなぜですか。説明しなさい。



氏名

50

問
二

8

--	--

問
二

8

--	--

4

4

10

--	--	--

4

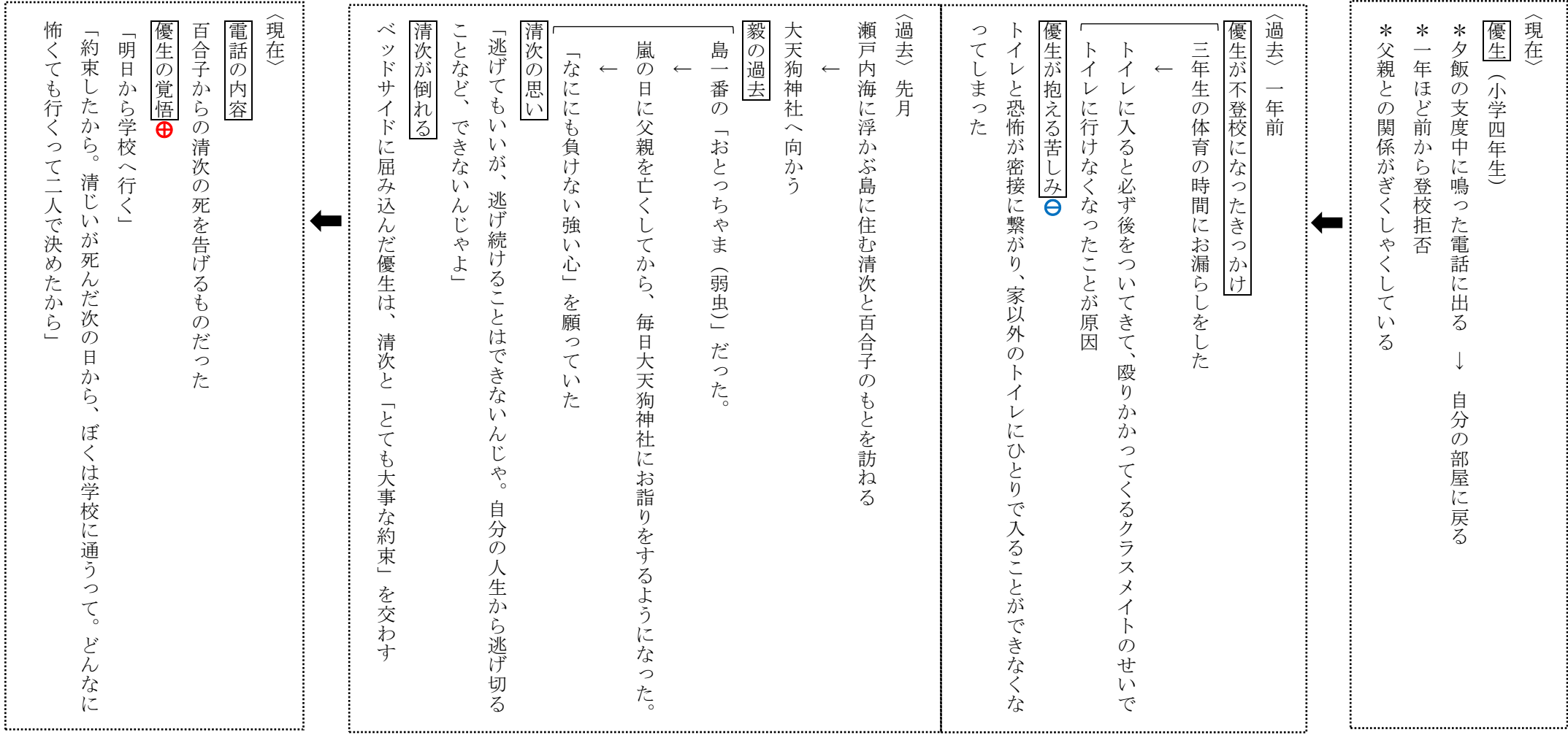
12

--	--	--

【著者紹介】

藤岡陽子（一九七一年生まれ）
同志社大学文学部卒業。報知新聞社を経て、タンザニア・ダルエスサラーム大留学。慈恵看護専門学校卒業。二〇〇六年、「結い言」で宮本輝が選考する第四〇回北日本文学賞選奨を受賞。二〇〇九年、『いつまでも白い羽根』でデビュー。

【本文の構造】



【解答】

- 問一 ③学校のトイレで繰り返し暴力を受けたことで、②トイレと恐怖が密接に繋が^り、③家以外のトイレに入ることができなくなったこと。
- 問二（１）③嵐で父親を亡くしたことで、②弱虫だった自分を変え、③何にも負けない強い心を手に入れようと決心したから。
- （２）強くなりた
- 問三 エ
- 問四 ③最後に自分の元気な姿をひ孫の記憶に留めておきたかった。また、②自分を頼^りってくれた孫の願いに応^えるためにも、⑤一年間も学校に行けていない優生を救う力になったかったから。
- 問五 逃げてよい
- 問六 ④曾祖父の死を一人で静かに受け止めたかった。そして、②死んだら自分の元へ来て一緒に戦うから、②翌日から学校へ行こうという②曾祖父との約束を果たすために、②学校へ向かう覚悟を決めるため。

【解説】

問一

《解答の方針》

〈中略〉のあとに優生が授業中に「お漏らし」をしてしまうに至った原因（＝優生が抱える根本的な悩み・苦しみ）が説明されています。ここをまとめましょう。

優生が不登校になった直接的なきっかけは「授業中のお漏らし」でしたが、そうなるに至ったもつと根深い事情が後の「優生の口から彼の本当の苦しみを聞いたのは」以降に書かれています。「クラスにひとり、暴力をふるってくる奴がいるんだ。」学校では一度もトイレに行ってない」という優生の告白を受けて、暴力自体を収めることはできたものの、「暴力による心的外傷」は依然残りました。その結果、「心の中で、トイレと恐怖が密接に繋がって」外のトイレそのものに脅威を感じる「ようになっってしまったのです。家以外のトイレに行けなくなったことで、優生は学校だけでなく外出そのものを避けるようになってしまったのですね。

問二

（１）

《解答の方針》

まずは「ある日」がいつのことなのかをおさえます。そのうえで、「少林寺の道場に通」うとはどのような意味があるのかを考えましょう。

毅は嵐の日に父親を亡くしたことで、大天狗神社へ足繁くお詣りに行くようになりました。「少林寺の道場に通いたい」と言い出したのも、このときだと考えられます。というのも、毅は大天狗神社で「なににも負けん強い心」を探してもらったことを願っていました。「少林寺の道場に通」うという行為もまた「強くなる」ための行為だといえるからです。「島一番のおとつちやま（＝弱虫）」だった毅は、父親を亡くすことで、そんな自分を変えようと決意したのです。

（２）

《解答の方針》

設問では「清次」が気づいたことが聞かれているので、この後の場面で清次が過去の毅について語っている部分を中心にさがせば良いでしょう。

毅が「なににも負けん強い心」を願っていたことを知り、清次は「毅が強くなっ
ていく姿を、うらはこの目で見てたんじや。強くなりたいと願った時に、人はもう
強うなってるもんじや。うらはそのことを、毅に教えてもらうたわ」と述べていま
す。

問三

《解答の方針》
——③は千佳の〈反応〉部分ですから、直前の〈出来事〉とそのときの〈気持ち〉を考えましょう。

尿意をもよおしてもじもじしていた優生の様子に気づいた清次は「立小便」を提案し、彼を藪の中へと引きつれていきました。そして、——③の直前では、優生が小便をしている音が聞こえてきています。問一で見たように、優生は「家以外のトイレ」に「恐怖」を感じて、外出すらできずにいました。しかし、このとき不登校になって以来初めて家以外の場所で小便をすることができたので、母親の千佳は何とかして恐怖を克服しようとする息子の姿に『感動』したのです。そして、少しずつではあるものの息子が変わりつつあることを感じて『希望』を見出しているのだと考えられます。

問四

《解答の方針》
——④の理由については、後の部分で百合子が説明しています。ここからポイントを引き出してまとめましょう。

「元気な姿を優生と茉由の記憶に留めておいてほしかった」ということとともに、「穀から電話があつて」優生がもう一年間も学校に行けてないから助けてほしい」と頼まれたために、その願いに応えようと奮起していたのです。

問五

《解答の方針》
設問条件に「清次自身が語っている」とあるので、本文中の清次のセリフの中からさがします。また、「一続きの二文」という条件にも気を付けましょう。

大天狗神社を参拝した帰り道で、清次は自分の人生を振り返り「勝つこともあつた。負けることもあつた」「時には逃げることもあつた人生じゃ」「ただな総領。逃げてもいいが、逃げ続けることはできないんじや。自分の人生から逃げ切ることなど、できないんじやよ」と優生に語っています。清次は、恐怖からトイレに向かうことができない優生の気持ちを理解しつつ、しかし、ずっとそのままにいるわけにはいかないと曾孫を鼓舞しているのです。

問六

《解答の方針》
まずは、優生が受けた電話はどのような内容のものだったのかをおさえます。そのうえで、自室に戻った優生が何をしていたのかをつかみましょう。

本文冒頭の場面の続きは、本文最後の場面で描かれています。優生が受けた電話は、「清じいが死んだ。午後六時十八分のご臨終だったって百合子おばさんが電話で教えてくれた」とあるように、清次の死を告げる百合子からのものでした。そうした電話を受け、自室にこもっていた優生が部屋から出てくると「頬に涙の跡が残っている」とあることから、まずは『曾祖父の死を知り、悲しみに暮れていた』のだとわかります。しかし、部屋から出てくる優生は「仁王立ち」になり「ランドセルの肩紐を右手に握りしめてい」ました。そして、「明日から学校に行く」、「約束したから。清じいが死んだ次の日から、ぼくは学校に通うって。どんなに怖くても行かつて二人で決めたから」と語っていることから『曾祖父との約束を果たすために、学校へ行く覚悟を決めていた』のだともわかります。あとは、優生がそのような覚悟を決めることができた清次との「約束」の内容についても簡単に触れましょう。「うらが死んだら、その日のうちに優生の元に行つてやるけん。うらが死んだ翌日は、わいの決戦の日じや。うらが天狗様に『総領の探しものを見つけてやってくれ』と頼んでおいたからこの戦いは必ず勝てるんじや」とあるように、

『曾祖父が死んだら自分の元に来て、一緒に戦ってくれるので、曾祖父が亡くなった翌日から学校に行こう』というものだったのですね。